

(戦時体制下の相馬中学校 19)

10 学徒動員：三年生（相中第45・46期生等）・・・ペンをハンマーに
《 横浜・海軍航空技術廠支廠へ出動 》

(8) 嘘からでたマコト

連日のごとく夜中に空襲警報があり、寮長の、

「空襲警報発令、全員退避せよ……」

の号令の下、真っ暗闇の中で服を着替え、防空壕へまっしぐら。その度に毛布一枚持って退避した。防空壕で仮眠するのだが、熟睡できることは決してなかった。「ドドーン」「ドドーン」とひびく高射砲の音、爆撃機 B29 から落とされる爆弾や焼夷弾の音、とても安眠できる環境ではなかった。

しかも、その上に蚤(のみ)と虱(しらみ)の攻撃は年がら年中とこころ構わずで、休む暇も無かった。その上、食糧事情は極端に悪化し、量は少なく絶えず空腹を抱えていた。

そして「ああ、家へ帰りたいなあー」と誰もが思っていた。

次に東條重治^(※1)の回想録を紹介しよう。

たまたま同郷の亘理町出身の木村圭介が少年航空隊に合格、一旦帰郷することになった。その時、木村に、「家に帰ったら『チチキトク』の電報を打ってくれるように言ってくれないか」と頼んだのだ。ところが、それから数日を待たずして、

「ハハキトクスグカエレ、チチ」

の電報を受け取った。その時の帰郷できる嬉しさは何物にもかえがたかった。嬉しさのあまりその晩は眠れず夜一人起き出して、こうこうと輝く月を一人見上げていたものだった。

とるものもとりあえず、車中の人となったが常磐線は相変わらず混雑していた。でも家に帰れるので一向気にならない。亘理駅から我が家までは約4kmもあるが、嬉しくて殆ど小走りで帰った。

ようやく家の近くにきてみると、なんと！家の門から葬式の行列がでてくるではないか。いぶかりながら、さらに近づいてみると、なんとそれは母親の葬列だったのである。

思わずその柩(ひき)にすがりついて号泣した。涙があとからあとから止めどなく流れて仕方がなかった。

「なぜ、こんなことに……。一体なぜなんだ！ どうしてなんだ！」

と泣き喚(わめ)いた。

叔父や叔母達になだめられながら、泣く泣く柩を離れて、しびしび葬式の列に加わることになった。

「ニセ電報を打ってくれ……」

と頼んだ筈なのに本物に変わってしまった。まさかこんなことになるとうちは露知らず、企んだ事が思いがけず裏目に出てしまった。仏事が終わっても横浜に戻りたくなかった。一遍に力が抜けてしまった感じだった。私は末っ子で、特に甘えん坊だったから、殊の外ショックが大きかった。

いっそ退学しようかと考えながらしばらくは家にいた。しかし、父親に説得され、何とか切符も手に入れてもらい(当時、切符はなかなか手にはいらなかった)、半月ほど家にいて横浜に帰った。そのあげく、付き添いの先生からはこっぴどく叱られたのだった。

続いて佐藤芳憲^(※2)と鈴木透の話に移ろう。これもまた本当の話である。

1945(昭20)年5月15日午前10時頃、休日なので寮でのんびりしていた佐藤芳憲あてに「ハハキトクスグカエレ」の電報がとどいた。思いがけない知らせに仰天し、早速先生の部屋に駆け込んで、事情をK先生に話して帰省の許可を願った。ところが先生は、

「この手を使って帰省しようとする者が時々あるからなあー、帰るなら自分で切符を手配して帰るんだなあ」と、まことにそっけない返事だった。

帰省する許可は出たものの、汽車の切符が手にはいらなくてはどうしようもない。遠距離切符を売っている駅までとんで行った。駅には十数名の者が、発売枚数制限の切符を求めて行列を作っていた。今日の分は売り切れた模様で、明日の切符のために並んでいる人々である。順番からして、どうにか切符が買えそうなので、その行列に並んでその夜は一睡もせず過ぎ、翌朝やつの思いで切符を手にいれた。

急いで寮に戻り帰省の支度をして車中の人となった。頭の中は、母の事で一杯だ。いくら気がせいでも汽車は各駅停車の鈍行で、相馬に着いたのが午後4時頃であった。家では親戚の人や近所の人が家にせわしく出入りして、かいいいしく働いていた。「もしや」の不吉な予感が脳裏をかすめた。家の中に駆け込むように入っていったら、予感的中した。母の顔には既に白い布がかぶせてあり、不帰の客となっていたのだ。それは十五才の時のあまりにも悲しい体験だったのである。

鈴木透^(※3)(旧姓水谷)が富岡寮にいた頃、夜中に、先生から呼び出しをうけた。先生の部屋に行くと、父が大学病院で手術を受け重体とのことで、『すぐ帰れ』と言われた。早速証明書をもらって切符を買い求め、帰途についた。上野駅付近から見渡す限り焼け野原となってしまった東京の様子を見てビクビクしてしまった。家に帰ってから連絡のため学校に行った時、雨天体操場の掲示板を見て、菊地・南原両君の死を知り愕然としたことを今でも鮮明に記憶しているということだ。間もなく、重体の鈴木父も亡くなってしまった。葬式を済ませてから、悄然と横浜に帰ったという。

(※1) 中第46回 昭和22年卒 吉田出身

(※2) 中第46回 昭和22年卒 中村出身

(※3) 高第1回 昭和24年卒 鹿島出身